ときには、辛口 15

◇子供部屋

松本道介
Matsumoto Michisuke

ニートという言葉がある。勉強する気もなく、働く気もない若者のことをそう言うのだと知ってはいたものの、念のために新語辞典をひいてみた。元来はNot in Education, Employment or Trainingなのだそうで、三つの名詞の頭文字の前にnotのnをつけただけの、ぶっきらぼうともいうべき造語である。日本語だったら〝やる気のない若者たち〟くらいに言ったほうがぴんと来そうなのに、或る意味で無機質なニートという言葉にするとかえってさかんに使われ出すところが面白い。

ニート、引きこもり、ウツ…

ニートという言葉から具体的な人間の姿を想像しようとすると、この三月まで教師だった私の頭には何人もの学生の顔が浮んでくる。と言っても顔が浮んでくるのはまだいいほうで、本格的ニートなら授業などに出てくる筈がない。大学にだって入って来ないだろう。したがってすぐに顔の浮んでくるニート学生というのは、初めは学校に出てきたものの、途中から出てこなくなり、高額の授業料を払いながら卒業もせずに消えて行った学生たちである。そんな学生の場合は、本人を呼び出して話を聞いたりアドバイスめいたことを言ったりしているのでかえって顔も名前も覚えていたりする。

しばらく前までそうした学生たちをニートという言葉で考える習慣はなかった。〝引きこもり〟とか〝ウツ〟とか適当な言葉をあてていたと思うが、引きこもりやウツはニートとかさなるところが多いにちがいない。現在ニートと呼ばれる人種は引きこもりやウツとして分類されながら、十年も十五年も前から存在していたとも言える。

〝外で遊べ〟と言われた時代

だが、私の若い頃にはニートなんていなかった。引きこもりにしろウツにしろまずいなかった……などと、老人たる私は、老人の悪いくせですぐに五十年以上前の若い頃を思い出す。若い人にそんな話をすると、ニートも引きこもりもウツもいなかったなんて、本当ですか？　と怪訝（けげん）な顔をされる。絶対にいなかったとは言い切れないが、まずいなかったことはたしかである。

なぜいなかったかと言えば、引きこもりなど不可能だったからである。小学生も中学生

も病気をしてないのに欠席することは許されなかった。頑張れば行けたのに学校を休むのは〝ずる休み〟であり、たいへんなやましさがつきまとった。不登校だの登校拒否だのと、なにか胸を張って学校へ行かない感じの言葉も当時はなかった。

引きこもりをやろうにも、子供には鍵のかかる個室など存在しなかった。どこの家も貧しくて子沢山だから勉強はあい部屋である。部屋も狭い、家も狭いとあって子供たちは追い立てられるように学校へ行ったし、学校から帰ってもなるべく外で遊べと言われた。エアコンなど存在しなかったから、家の中は外にくらべて涼しくも暖かくもない。したがって子供たちも外へ出るのがおっくうではなかった。

という次第で〝引きこもり〟など不可能に近かったものの、ごく稀に〝引きこもり〟がいるにはいた。金持の一人息子で甘やかされ放題、立派な子供部屋に引きこもり、大学はなんとか出たものの就職はせず、司法試験などの勉強にかこつけて人ともつきあわず、結婚もしないで中年、老年にいたる。そんな人生を送った同世代の男を二、三人知っているが、私の目にはたいへんなぜいたくと映る。

しかし今では鍵つきテレビつきの子供部屋が少しもぜいたくではなくなった。子供の数が少ないせいもあってむしろ個室の子供部屋を持たないほうが少数派になったのではなかろうか。そしてこの個室の子供部屋こそが引きこもりにウツにニートを生む温床となったのではなかろうか。

孤独な〝個室〟

最近知った『家をつくって子を失う』（住宅産業研修財団）という本にはそのことがはっきりと書かれている。著者の松田妙子さんは昔衆議院議長をつとめた政治家松田竹千代のお嬢さんである。お嬢さんといってもすでに八十近いお婆さんだが、或る会合でスピーチをされたその姿には五十代の若さが感じられた。

私は老人世代の人間として松田さんの説に心からの共感を覚える。松田さんは大工志望の若者を棟梁（とうりょう）に託し、三年で一人前にする「大工育成塾」の運動をすすめている方なので部屋というものに格別のこだわりを持ち、カギのかかる子供部屋の普及が親子関係の断絶や自己中心的な子供を生み出す一因になったと言われる。

この視点から私はさらに自分自身の問題としても考えるのだが、今は親子関係をはじめすべての人間関係が稀薄になりつつある時代だと思う。つまり親も個人、子供も個人という具合に師弟から、老幼、夫婦、先輩後輩すべてが個人対個人として向かいあう時代になった。

昔は周囲に濃密な人間関係がたくさんあったから孤立して生きる人間は〝孤独〟であった。〝孤独〟というのは寂しいこと悲しいことであり、その孤独をたくみにうたうのが詩人の仕事であった。だが、今のように誰しも個人という時代になってみると、孤独はごく当り前で詩や小説の題材にさえならない。

むろん人間を孤独にしたのは立派な子供部屋だけではない。私の子供の頃にはまったくなかった文明の利器の数々、テレビにクルマにケータイ、パソコンにウォークマン、それに洗濯機やエアコンまで結果として人と人のあいだをへだてる働きをしてきたと近頃の私は思うようになった。

（中央大学名誉教授）